



季刊わたぼうし

NO. 81
'09夏

シリーズ
本田 雄志さんと語る Ⅲ

宮田 比呂雪



コマーシャル

使い捨てろと

買い替えろ



今回の目次

※シリーズ・本田雄志さんと語るⅢ 2

出席者

- ・ 本田 雄志 (ほんだ たけし) 氏
- ・ 西村 正悦 (にしむら まさよし) 氏
- ・ 川崎 節子 (かわさき せつこ) 氏
- ・ 嶋田 三穂 (しまだ みほ) 氏
- ・ 桶屋 善一 (おけや ぜんいち)

※みんなの広場

- ・ 大阪に引っ越しをして早5ヶ月……

悪徳福祉評論家 9

- ・ デジカメを使いやすく 平井 誠一 10

※協力会費納入のお願いについて 12

※川柳裏表紙 12

※編集後記 12

この機関紙は障がいのある人、ない人が自由に考えを出し合い、主義・主張を越えて、お互いを理解し合う中から共に生きる豊かな社会を作っていくことを目的として発行しています。

シリーズ 本田 雄志さんと語るⅢ

～郵便屋さんで障がい者福祉の世界へ～

【目的】

全く福祉の世界に関係のなかった人が、郵便局を定年まで2年あまり残して退職し、精神障がい者の世界へ飛び込んだ男性の人生を紹介する。

【経緯】

本田さんと出会ったのは、3年前から月に一度、地域活動支援センター「ワークショップ野の花」の利用者・職員の方々が「青山彩光苑」へ出前喫茶に来られたことがきっかけです。その後、本田さんを紹介され交流が始まりました。

2006年10月から七尾駅前第二地区市街地再開発ビル「ミナ・クル」のバリアフリー体験に参加させていただき、七尾市長との懇談会など、いろいろと交流させていただきました。

先日、ある食事会で本田さんの歩んで来られた話を聞かせていただき、皆さんに紹介したいと思いこの企画をしました。

【語る内容】

- ・何が郵便局を退職して障がい者福祉の世界へ飛び込むきっかけになったのか？
- ・精神障がいの方々と出会って苦勞すること、楽しかったこと。
- ・障がい者自立支援法になってから、利用者の方々の負担は多くなったと思いますが、生活にどのような影響がありますか？

【日時】 2008年5月17日(土)11時～

【場所】 「食事処・麺の華」
(七尾市生駒町)

【出席者】

- ★特定非営利活動法人「野の花」理事長
NPO法人野の花
地域活動支援センター「ゆうの丘」施設長
本田 雄志氏 (ほんだ たけし)
- ★「青山彩光苑」職員
西村 正悦氏 (にしむら まさよし)
- ★「身体障害者ホームセレーナ青山」在住
川崎 節子氏 (かわさき せつこ)
- ★「HSK季刊わたぼうし」読者
嶋田 三穂氏 (しまだ みほ)
- ★「HSK季刊わたぼうし」編集委員
桶屋 善一 (おкеや ぜんいち)

【企画・主催】

「HSK季刊わたぼうし」編集委員会



地域活動支援センターI型「ゆうの丘」の概要

1. 設置場所

七尾市矢田町ミ81番地2

(旧七尾商業高等学校同窓会館)

2. 運営主体

特定非営利活動法人 野の花

(理事長・本田 雄志)

3. 施設の概要

平成19年度自立支援基盤事業により、旧七尾商業高等学校同窓会館を改修したもの。

地域活動支援センター「ワークショップ 野の花」(精神) 及び「ハウスにここ」(知的) が合併し、平成20年4月1日開設。(平成20年4月21日事業開始)

- ・構造：鉄筋コンクリート3階建て。
- ・整備内容：障がい者トイレの設置、階段手摺の設置、スロープの設置などの施設のバリアフリー化、生産活動（アルミ缶プレス）のプレハブハウス設置など。

4. 活動目的

地域に生活する障がい者が、活動を通して自分らしい生き方を見つけるために集う活動

の場です。就労を目指し軽作業を行ったり、仲間と過ごすことで楽しみを見つけたり、地域で過ごすために必要なことを身につけたり等、個々の目的に応じて支援を行っています。

また、当事者を支える家族等の支援や相談、そして地域に出向くことにより地域住民の理解や交流につなげ、障がい者の社会参加を目指します。

5. 活動内容

(1) 生産活動

- ・内職作業（菓子箱折り、ハーネス等）
- ・自主製品（クッキー、パウンドケーキ製造販売、小物等）
- ・アルミ缶回収プレス
- ・清掃作業（公園、庭園等）
- ・出前喫茶（障がい者施設）等

(2) 創作活動

手話・絵画・太鼓・調理各教室
「ふれあい農園」等

(3) ボランティア活動

- ・高齢者施設、障がい者施設、地域（町内・公民館）の清掃活動



作業室2



作業室1



休憩室



食堂



相談室



作業室3



ゆうの丘建物全体



アルミ缶作業小屋

本田雄志氏と語るⅢ ～郵便屋さんが障がい者福祉の世界へ～



桶屋・西村氏・川崎氏・本田氏

前号からの続き↓

※西村氏は途中退席しています。

嶋田：民生委員の弱い所は「障がい」についてですね。

本田：「障がい」は全然、違う分野という考え方を持っているから。でも、最近少しずつ考え方が変わってきたような感じですね。障がいがある、ないを関係なくして、その人が本当に何を求めているか？心の求めとはどんなものか？

嶋田：友人が社会福祉協議会にいる時「常に当事者主体」という言葉を言ってたけれど、本当に「当事者にとって何だ」という点で考えない限り理解は難しいですね。

本田：川崎さんがさっき言ったように「不都合って何ですか？」と言ったのと同じ。私も一番最初に「野の花」へ行ったときに、高齢の方が意外と多かったです。親がいないので弁当を見たらすぐに分かるのです。おかずがないのです。それで私も昔、日の丸弁当だったと思って。私もずうっと日の丸弁当で来ていました。

話は変わりますが、郵便局を辞めてから5年間ずうっと健康診断を受けていませんでした。家に帰って横になったら起きられないほど、ものすごく疲れるので「どんなのか？何でなんかな？」と思っていました。考えてみると、郵便局を辞めてからの方が忙しいからね。さっき言ったように役職をどれだけ持っているのかな？今日ここへ来るまで調べてみたら23も役職がありました。

嶋田：できますか？そんなに。

本田：出来ないね。

嶋田：迷惑がかかるのではないのでしょうか？

川崎：名前だけ？

本田：いや、名前だけはでないです。そんなことはできないから。

嶋田：いやでしょう。そんな性格ではないから。

本田：やはり、町会長をしている関係でいろいろなものがくっついてくるのですね。

桶屋：やっぱりね。

嶋田：町会長だけでなく、公民館の委員会とか、市の委員会などに出席しますからね。

本田：私は福祉計画審議会の障がい者福祉分科会委員に入っているのです。これは入っていかなければいけないということで。

嶋田：町会長はね。

本田：町会長ではなく、これは本来は家族会がやらねばいけない。精神の家族会でやっていかなければいけない。「続けられないし、頼む。代わって頼む。」これは良いチャンスだと思いました。それで東京に「きょうされん」の藤井克徳さんという方がおられて、あの人は目が不自由な方で、知的の養護学校の先生をやっておられました。そして自分のお兄さんが精神の障がいをお持ちです。それで目が見えないようになってから、精神保険福祉士の国家試験を取得された方です。

その試験を受けるのに目の見える人を対象にした試験のやり方、あり方に対して「国家試験、国のやる仕事なのにこれは何ですか？」ということで問題提起をしたすごい人なのです。私もすごい人と出会ったな—と思って。私も何もわからないので「きょうされん」のセミナーがあったので、京都へ初めて行って3日間の研修を受けました。次は大阪かね。そういうセミナーがあったときは参加しています。

この「きょうされん」のセミナーはすべての障がいを対象にしたものです。たまたま受けたのは精神部会のものです。講師の藤井さんは目が見えないけれど、北海道から沖縄までの参加者の名前を全部言うのです。ビックリしてしまって、この人は目が見えないのに何故わかるのかと思ったら、パソコンで打って自分で覚えているのです。

嶋田：私たちの周りにも視覚障がいのお友だちがたくさんいるけれど、見えないからこそパソコンを使ってそうしないと。

本田：それを思ったとき、障がい者の人たち

もすごいなと思い、尊敬します。たとえば川崎さんにしてもすごいなと思います。桶屋さんにしてもね。

私たち元気な者は不都合を感じていないのが、肉体的にも精神的にもハンディがない者が何が出来ると言ったら、今はこんなことしかできないのではないかと思います。例えば施設の所長であったり、町会長もしたりということ。

アルミ缶の作業・回収した缶を手でつぶしてプレス機にかけます。



嶋田：講習を受けたりしているところがすごいね。単なる肩書きでないところが違うね。結構な肩書きに人でも「何でボランティアに予算をつける?」「何でコーディネーターが必要なんだ?理解がないですよ。」

本田：今の武元七尾市長は違うね。どんな人でも会ってくれる。

嶋田：だから、武元七尾市長はそういう点では財政が苦しいけれど、まだ光があると思う。でも街を見ていたら、羽咋の方が良い流れが出来て、七尾は障がい関係が遅れていると思った。羽咋より遅れている。

川崎：遅れている。ものすごく遅れている。

嶋田：みんなそれぞれ違うから、下駄箱会議でなく、みんなテーブルに載せて議論しない

と街は良くなっていかない。



「ゆうの丘」では全12種類のクッキーを作っており、一袋250円で注文販売を行っています。

川崎：議論以前の問題もある。ここが都合が悪いからなおして欲しいとか、ここをこのようにして欲しいとかと言いますが、設計ミスが多いです。

本田：はい。そうそう。

川崎：福祉課に設計士がいるのに。

嶋田：羽咋で以前、社会福祉協議会の福祉セミナーの講師に七尾のTさんをお呼びしてバリアフリーのお話を聞きましたが……。

本田：Tさんを怒りつけてやった。あんな人を講師に呼ぶなんて。「ミナ・クル」を設計したのはTさん。

だから、どんな視点で設計したのか。

川崎：全然バリアフリーになっていない。

本田：私も一緒に車いすに乗って、桶屋さんとトイレに行ったら、片手の人は絶対に利用が出来ないです。車いすマークが付いたトイレなのに。

川崎：それに、トイレに入ったら入ったで、回転できないぐらいのスペース。



嶋田：羽咋にもそのような所はありますよ。

川崎：大きいベッドがあって戸が開けられない。

嶋田：「ミナ・クル」が今できたとは思えない。

本田：何とか、改修はしてもらいました。

嶋田：「H S K 季刊わたぼうし」に出ていましたから。

川崎：そうしないとみんなのためにならない。国際障がい者年で、障がい者の見直しなどがあった期間の方がまだ良かった。国際障がい者年の10年が終わってから、まだ続いているはずなのにも関わらず、頭から消えてしまっているのか知らないけれど。

嶋田：打ち上げ花火だったのかね。それが。

川崎：そうなのです。本当に。

嶋田：地道に根付かなかったのですね。羽咋にも障がい者福祉に関して時計の針が戻った部分がありますね。

川崎：あのときが一番良かったよ。

本田：これはやはり、小泉改革というか、郵政民営化ということで、民営化したおかげでやめていく、お年寄りが利用できなくなってきた。あれはだいたい改革ではなく後退した考え方です。法律なんてもってのほか。

郵政改革の郵政民営化で選挙をやるための仕掛けの方法として、自立支援法を廃案にしたわけ。

本田：羽咋は社会福祉協議会がものすごく良かったのではないですか？私も社会福祉協議会というものの自体の存在が不透明な部分がありますが、あれは行政の下請け機関も備えているけれど。それなら行政から金をたくさん取って地域福祉のために行うことが、本来の社会福祉協議会のあり方ではないかと思う。

嶋田：行政もお金がないので、自立してやっていくということで羽咋は「自立事業型」ということで平成14年度から在宅のヘルパー・訪問看護も全部「社会福祉協議会」が持って、その中の収益の中で人件費も出してということをやって、結構いろんなことをやってきているのです。地域福祉の要はボランティアをたくさん育てて、その人たちと地域へ根ざすというので、ボランティアセンターができ、ボランティアグループの連携を作り、今度は地域のネットということで、地域福祉推進委員を認定された人を中心にした「まちづく

り」を縦糸と横糸でやってきて「さあ、これから」というところでトップが変わり方針も変わった。

川崎：何も変わっていない。

変に言うと、机の上で福祉の勉強ばかりして頭がカチカチな人がいる。そんな人に比べれば未経験者の方が真剣に対応してくれるし、考えてくれるし。あんな資格（介護福祉士・社会福祉士など）なんて要らない。資格を持っていたても何もならない。

それなら普通の民間の人を連れて来て、「それはこうなので」と言った方がなお、話をうまく持って行ってくれる。

嶋田：私たちはごく普通の市民なのです。たまたま社会福祉協議会で地域福祉の事業をとって、地域福祉を進めるというなかで、いろいろなボランティアが集まって「ああ、そうなんだ。「まちづくり」は本当に住民参画が大事や」と勉強させられました。いろいろな福祉セミナーを次々と仕掛けられました。

福祉教育も子供から大人までの一貫したちゃんと系統を出して進めてきて、さあこれから横糸が結ぶようになったときに、社協の方針が変わった。

羽咋にボートピアが来るという話があったときに、私たちは本当に主婦レベルで反対しました。住宅街で「あおぞら」「リヴ」という等福祉施設の近くだし、中高生の通学路です。「安心で安全なまちづくり」を進める羽咋に合わない。本当に主婦レベルで住民の目線で反対する、そんな元気な住民を社協が育てた。

本田：財政基盤を市の行政とすれば財政悪化で、ボートピアというそういうものを着眼点

でやっているかも知れないけれど、間違っていることです。

嶋田：私たちは地域福祉で「誰もが住んでいて良かったまちづくり」という社会福祉協議会の理念に共鳴したから、社会福祉協議会の活動に参加したのです。ボートピア反対のそういう理念も一緒でしょう。「住んでいて良かったまちづくり」にボートピアはおかしい、というのは対人ボランティアをしている、障がい者や高齢者の方、子育て中の方、支援す

るサークルが羽咋にはたくさんあって、そういうサークルみんなの反対です。請願まで出して。

本田：七尾はそういうことはないですね。意外とそういうことは市長が取り上げてくれます。

嶋田：そんな感じの市長さんですね。

次号へ続く↑

シイタケ栽培 収入源に



シイタケの産を原木に植え付ける利用者「ゆづの丘」で
矢田町の地域活動支援センター

七尾の障害者施設

景気悪化で 仕事量減少 今月から挑戦

世界的な不況が障害者施設の仕事の受注にも影響を及ぼす中、七尾市矢田町の地域活動支援センター「ゆづの丘」(本田雄志施設長)は今月から、新たな仕事としてシイタケ栽培に乗り出した。(寺本順弘)

ゆづの丘はこれまで電気配線の組立などを、おみやげ用の菓子してきたが景気の悪化で製作や自動車部品の仕事量が減少。また設の収入減に追い打ちをかけていた。

新たな収入源を模索する。利用者の技術も日進月歩で、既にシイタケ栽培に取り組み始めていた和倉温泉の旅館「宝仙閣」の嶋千山(約二百二十本)に、現在、施設の収益の六割強がシイタケ栽培の収入になったとい

作業者は、長さ約九十センチの原木にドリルで穴を開け、本施設施設長は「毎週二十個開け、それぞれ年安定した収入が入るのには面が入った円柱形のはありがたい」と話している。

その後はシイタケの成長を促すために原木のシイタケ作りでほとんどはかせ方を覚えること。どうも今は無いと言っや、収穫など作業は数ヶ月が将来的には、和倉の多くある一方、複雑な旅館やスーパーで販売作業はほとんどない。し、和倉温泉の新しい計画では年間三千本名物にできたらと期待

ずつ原木を作り、一万している。

本にまで増やす予定。一本の原木からシイタケが収穫できるのは三年間程度で、収穫を続けるためには原木を更新する必要があるため継続的な作業が望めるという。

みんなの広場

大阪に引越しをして、早5ヶ月・・・

悪徳福祉評論家

あきらめなければ、願い事が叶うのだと、今回のことで思った。今回、大阪に引越しをすることにあって、ずいぶん反対もされてきたが、一人のある人の助けがあったからこそ、大阪への引越しが叶ったのだと思っている。〔とりあえず、まずはその人に感謝をしたい〕

反対する人たちは、自分のことを心配してくれているのではなく、自分や自分達の職場に不利なことを避けるためだ。そういう奴にカギって、善人な口調で反対してくるものだとよくわかった。まっ、これで一つ目の願いが叶ったのだから、これからはいくつもの願いを叶えるために自分が頑張るしかないと思う。自分がどのように願い事を実現していくか計画性が必要だし、それに加えて、良い友達と仲間を増やしていくことが大事だと思う。

都会は田舎とは違って、チャンスもいっぱい転がっている。それと、同じに嘘もいっぱい転がっている。それがチャンスなのか、嘘なのか、よく見分けるのも自分にとっての大きな責任だと思う。たとえ騙されることがあっても、それはべつに悪いことではなく、良い勉強だと思い、また前をむいて歩いていけばいい。だが、自分は騙されても、けして自分は人を騙して陥れたりはしないと決めている。だって、騙されるよりも騙したという後悔の罪が重いからだ。騙した瞬間は罪だとはわからないけれど、歳を重ねるごとに後悔の

罪というのが重くのしかかるからだ。騙された側は一瞬だけ悔しさと絶望感に苛まれるが、時間が経つたびに忘れることができる。僕はいつもそう思い、今まで生きてきた。

話はそれてしまったが、都会というところは優しく何でもそろっているが、その裏には“だます”という言葉が潜んでいる。だから、僕はこれから強く生きて、前よりもお金と時間に計画性をもって生きていこうと思っている。

さて、大阪へ引越しして、早五ヶ月が過ぎていった。いざ、大阪で生活してみて、どう思ったか？と聞かれると、たしかに“厳しい”と言ったほうが正しいだろう。現在、施設で暮らしているが、やはり人間関係が難しい。まっ、今回の施設は人数的にも少なく、比較的に楽で所長“施設長”も仕事には厳しいけど、僕ら障がい者のことを第一に考えてくれているし、作業も前いた施設と違って、やりがいもあるし、工賃もそれなりにもらっている。所長も自ら作業に出て、指導にあたっている。自分のことだけど、僕は家族または身よりもない。そんな僕に所長は全帰〔毎月一回、全員帰宅日があって、全員は家に帰らないといけない日〕の日は、理事長に掛け合ってくれて、施設に居られることになった。そして、来年度からは帰宅日をなくしてくれて、僕はホテルとかに泊まる必要がなくなった。僕は思った、このような所長さんは今までに出会ったことがなかったと……。

現在いる施設の所長は全帰のときは、所長はボランティアで泊まりをしている。このような施設長は今後の福祉に必要だと思った。やはりこれからの福祉施設は施設長自ら現場に出て、入所者や指導にあっている職員の話を聞いて、共に考えることが必要だと思った。

僕はこの所長に対して、足をむけて寝られな
いと心で思った。

そして、大阪の障がい者はまさに強い。僕
も強くありたいと願っている。またここでい
ろんなことを学びながら次への願いを叶えたい
と思っている。いろんな人に出会って、いろ
んな人に感謝をしながら願いを一つずつ叶
えて活きたいと思う今日この頃である。いつ
もながら粗末な文書ですみません。



デジカメを使いやすく

平井 誠一

私は、中学生のころからカメラが大好きで
先輩と写真部を作って撮影したり、現像や焼
き付けをしたりして楽しんできました。近年、
デジカメが出てくる中で、私もマニュアルから
デジカメに変えてきましたが、二次障害で
首の手術を受ける中で首の動きが制約される
ようになり、好きな写真が撮りにくくなりました。

そこで、首の動きや腕の力がなくても写真
が撮れないだろうかということでインターネット
で調べました。ひとつは、三脚を使いやす
くどこにでも固定できるもの。もうひとつ
は、ズームレンズを使いたいし、そのために
は重さを支えることやシャッターのぶれをな
くしたいということでシャッターの改善を考
えました。

私の持っているデジカメは、キャノンとソ
ニーのものです。キャノンのカメラは840万画
素でリモコンシャッター付きですが、ソニー

のサイバーショットW300は1360万画素です。
このW300には、ズームレンズと広角レンズを
つけて使いたいのので買いましたが、ズームを
つけたら重くてピントが合わせにくいのとシ
ャッターぶれが起きてしまいました。車いす
を利用しているので何かうまいものがないか
インターネットで調べていきました。

〈おもしろい三脚〉

三脚で面白いものを見つけました。ゴリラ
ポッドという製品で三脚の足が自由に曲がり
木や車いす、ペットなどにも固定できます。
製品には重量がどのくらいまで耐えられるのか
によって何種類かあります。



〈シャッターの自作〉

自動シャッターというも
のがないか探しましたが、
残念ながらなくてインター
ネットで見ていると自分で
作っておられる人が紹介の
ブログやホームページがあ
ったので、自分で作ることにしました。

カメラ屋でレリーズ(シャッターを遠隔できる
ためのもの)とプレート(三脚に機材を2台セッ
トできる)、あとはホームセンターで蝶ネジ4
個、六角ネジ2個、ワッシャ8個、抜けないネ
ジ2個、板状フレーム1個、椅子の滑り止め一



袋、じゅうたんの滑り止め
一袋を買いました。予算は
総額で7000円ぐらいです。

難しかったところは、デ
ジカメのシャッターとレリ
ーズのあたる部分でデジカ
メでは反押ししてピントを
合わせてから、そのまま押

し込んで撮影になりますので、レリーズの芯がデジカメのシャッターの部分から滑ってしまふので、滑り止めにシャッターにゴムを付けました。また、レリーズは普通はカメラのシャッター部分につけるようにねじが切れていますが、自作のフレームに固定するのに椅子の滑り止めゴムを付けました。苦労しました。

〈完成品〉

自作シャッターと三脚を合体させてみました。我ながらよく出来たなあと思います。見た目は少し悪いのですが、なんとか作りました。



さて、どのようなところで活用できるのかということなんですが、普通の三脚と違うのは三脚の足が自由に曲がること、そのためにペットや木、車椅子のフレームや机などにも固定できます。さらには、カメラが重くて持てないとか障害のために手が震えたりする人にはいいと思います。

〈ブレを防ぐことができる〉



さて、もうひとつはズームレンズなどを付けた時に、シャッターを押したときにぶれないようになったことです。ズームレンズを使うと遠距離感が出てすごく面白い写真が撮れます。

今回の完成で、いろんな写真を撮ってみようと思います。また、その成果を報告したいと思います。



(「自立生活支援センター富山」 ブログ「リーぶる・ライフ」より)

以下の2枚の写真は、5月15日に次号から掲載予定の富山市のポータル「ライトレール」の取材に行ったときに、平井さんに撮影させていただいたものです。



協力会費納入のお願いについて

平素は「H S K季刊わたぼうし」をご愛読いただきありがとうございます。

「H S K季刊わたぼうし」は1985年(昭和60年)1月に「羽咋わたぼうし会」の有志で施設利用者・在宅障がい者・健常者の交流を目的に創刊しました。

創刊以来、読者の皆様からの会費をいただきながら25年間、発行を続けております。

今後も能登地方の障がい者福祉活動として「H S K季刊わたぼうし」を存続させていくため皆様のご協力をいただきたく、今回、郵便振替用紙を同封させていただきました。

なお、これは強制ではなく、主旨をご理解の上ご協力いただきますようお願い申し上げます。また、既に振り込まれた方にも、送付作業の関係上、振替用紙が同封されていますのでご理解いただきますようお願いいたします。

2009年4月

「H S K季刊わたぼうし」事務局



年間協力会員募集中

この機関紙は障がいのある人、ない人がそれぞれの考えを出し合う中から、互いに理解を深め、共に生きる豊かな社会づくりを目的として、有志により発行しています。

つきましては、主旨に賛同して協力会員になっていただく方々を募集しています。

この会費で、在宅障がい者や福祉関係機関等に送付していますので、機関紙一部の料金ではなく、年間協力会費として扱っています。

年間協力会費：2,000円

会費振込先：郵便振替口座

振込先名義：わたぼうし連絡会

00750-6-9791

編集後記

新年度を迎え、早3ヶ月が過ぎようとしています。そんな中、新型インフルエンザが流行というニュースが毎日流れています。昔はなかった新しい病気が次々と出て来て怖いですね。

さて、次号より富山市内の新交通システム「ライトレール」、七尾市内で絵画展を開かれた方の記事を掲載します。これからも新企画に挑戦したいと思っています。(Z.O)



川柳裏表紙

買い替えろ 使いすてろと コマーシャル

平成23年7月からの完全地上デジタル放送移行化に備えてでもないのですが、昨年の10月に新しいテレビに買い替えました。前のが見られなくなったから……。年金暮らしの私には大きな出費でした。しかしそのテレビからまだ地デジのCMが流れてきます。

民間放送局のニュースやドラマ等の間に入るCMはいつも同じものだ。しかも佳境の時には入ってくる。(そんな古い物もう捨てろ!!そんな昔の車はCO2が出て地球環境に悪いゾ買い替えろ!!)と私たちに叫んでいるようだ。(比)

編集及び連絡先

「H S K季刊わたぼうし」ホームページ

<http://jiritsusien.com/>

メール：zen@san9.net

定価二〇〇円